

民主化闘争情報

No. 890
2013年10月9日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

『週刊文春』『週刊新潮』などで、JR総連・JR北海道労組(北鉄労)の安全問題に対する姿勢を批判し、「革マル派浸透問題」を指摘した記事が掲載されたのは既報の通りだが(闘争情報No.886~888)、以降も、多数の新聞、週刊誌が、北鉄労の「平和共存否定」および北鉄労と会社の歪な労使関係を大きく取り上げている。

歪んだ労使関係の実態

「他の組合員と会話禁止」で風通しのよい職場風土が確立できるのか

産経新聞(10月7日朝刊)は「トラブル背景 労組の闇深く」と指摘し、いわゆる「平和共存否定」問題に触れ、情報伝達が阻害されている背景にJR総連・JR北海道労組の存在を挙げた。また、昨日発売の雑誌『アエラ』(朝日新聞weekly AERA10月14日号)は「歪んだ労使関係の実態」と報じたほか、『週刊東洋経済10月12日号』では「レール異常放置したJR北海道の病弊」と題し、「経営体制の抜本的見直しや企業風土改革が急務」と指摘したほか、さらには『週刊ダイヤモンド10月12日号』では「不祥事続きJR北で囁かれる旧国鉄の“亡霊”・労組の影」として、労使関係や組織体制に疑問を投げかけている。

「他の組合員と会話禁止」伝達阻害

「他労組と飲みに行くことや結婚式に呼ぶことを禁じる風通しの悪い部署がある」「他の組合員との会話を禁じ、業務伝達も難しい」。情報伝達が阻害される背景として、複数の社員は、最大派で・・・(中略)社内に影響力を持つJR北海道労組の存在を挙げる。【産経新聞 10月7日朝刊】

不祥事続きJR北で囁かれる旧国鉄の“亡霊”・労組の影

「誰もはっきりとは言わないが・・・」(中略)事情をよく知る複数の関係者は、原因について「労働組合のあしき遺産、サボタージュが根底にないとは言い切れない」というのが一致した見方だ。(中略)自民党北海道連の伊藤良孝会長が、財務問題と並列して挙げたのが、JR北の「決まりを守らない点やモラルの問題だ」【週刊ダイヤモンド 10月12日号】

JR北海道で頻発する事故、不祥事の背後にあるのは歪んだ労使関係の実態

組織的な弊害として指摘されているのは、大きく二つある。社内規律が守られていないこと、そして職場コミュニケーション不全だ。そこに労組の存在が大きくかかわっているというのである。(中略)最大労組の北海道旅客鉄道労働組合(JR北海道労組)は、全社員約7千人のうち、実に、管理職を除く84%が加入する圧倒的な数を誇る。それだけに会社側は、その対応に神経をすり減らしてきた。その端的な例の一つが、アルコール検知問題だ。(中略)03年にJR連合傘下のJR北海道労働組合(JR北労組)が結成されると、JR北海道労組はこれを徹底的に敵視し、「平和共存否定」路線を掲げて自組合員に他労組との接触を禁じた。(中略)(朝日新聞weekly AERA 10月14日号)】

北鉄労は「平和共存否定」運動の旗を降ろすべきだ！
安全の確立に向けて、風通しの良い職場風土を！